

十組問屋 大坂屋孫八のルーツ

東京油問屋市場百周年記念誌（平成12年発行）の「東京油問屋組合の群像」で紹介されている「大坂屋松沢孫八商店」についてのことである。「江戸最大の油問屋で江戸十人衆にも挙げられ、將軍家へ献上した御用金も一万両にのぼった・・・」と伝えられる大商人である。「江戸買物独案内」（文化文政）にも「十組 色油問屋 本石町三丁目 大坂屋孫八」と紹介されている。

なかなかそのルーツに手がかりがなかったが、上伊那郷土研究会（長野県伊那市）発行の「伊那路」（平成26年12月、平成27年1月）に松澤務氏の「江戸に出た兄弟が商人として成功した記録」が掲載され、大坂屋孫八のことが少し判明したので、簡単に紹介する。

それによると、孫八は江戸時代の伊那郡田畑村（現 南箕輪村田畑区）勘太夫家（農業の傍ら、たまり醤油の製造販売と薬種販売を営む）の六男（天和2年、1682年生まれ）として生まれ、当時長男以外は村外に職を求めるという制約の下、二男八右衛門と共に百両前後の元手を持たせて江戸に行かせた、ということである。当時、八右衛門は25歳、孫八は14歳である。特に江戸に出ることを「江戸稼ぎ」と呼んだようである。

徳川家康は、もともとほとんど人の住んでいないところに、城下町を作ったわけだが、城を構えたところは後ろに武蔵野台地と前には干潟が海に向かって広がっており、水も悪いし大勢の人間が生活できる場所ではなかった。そこで天正18（1590）年に江戸城に移って以来、海を埋め立て水を引き、居住区をつくっていった。

当時小高い丘だった神田山を切り崩し新橋付近を湾口とし大手町付近まで入り込んでいた日比谷入江を埋め立て、河川を付け替え、城下町として形が整ったのは、江戸城完成を見る3代將軍家光の頃ではないだろうか。

そうした土地の造成の進展に伴い、全国に「土地を割り当てるから（地租は取らぬから）商業を営みたいものはやってこい」というお触れをだし、人を呼び寄せたのである。

さて孫八であるが、松澤氏によると、元禄9（1696）年に江戸に出て、先に江戸で店を構えていた兄の八右衛門の店に身を寄せ、宝永4（1707）年、八右衛門のもとを離れて神田今川橋北一丁目、乗物町松村常兵衛の店を借用、とある。

大坂屋伊兵衛の発起となる十組問屋結成が元禄7（1694）年であるから、八右衛門、孫八兄弟が十組問屋に入るのは少し後になるのであろうか。いずれにしても、兄弟協力して商いを行い、兄の八右衛門は薬種業を主な生業として、孫八は灯明油でそれぞれ大商人となっていくのである。

どのような経過で「大坂屋」屋号を名乗ることになったのか、その経緯は不明だが、発展する江戸に引き寄せられるように商人が全国から集まったその中の一人に、その後の東京油問屋市場につながる芽をみいだせたのは何とも興味深いことである。

